紹介・臼杵市文化財管理センター蔵『長崎道中日記』（一）

徳岡　涼

はじめに

本書は、臼杵掛町において組頭・筆役を務める家、加島家の加島英国（天明二年正月（一七八二）～嘉永七年閏七月（一八五四））によって記された一書である。英国は、寺子屋を営み、多葉粉屋の屋号で、手広く商業も営んでいた。一方で、俳諧・茶道・花道にも通じ、また、陰陽頭阿部晴親に学び、一本職御朱印も戴いている。特記しておきたいのは、江戸表測量方伊能勘解由（忠敬　隠居して勘解由）から測量術を伝授され、藩から測量した絵図掛かりを命じられていたことである。

内容は、安政六年（一八五九）十二月晦の序文を伴うが、本体は嘉永七年二月二十三日に臼杵を出立し、長崎奉行に「絵板」（踏絵）を返却する旅に、英国が同行した往還記である。英国最晩年の紀行文といえる。序だけは、別筆（走り書きの態）と思われ、この部分だけが擦り切れた状態の箇所もあり何らかの事情で、英国没後、英国の認めていた物を、写したものなのであろう。

序文によると、当座記された草稿の内、往還の道中部分だけは清書されていたらしく、その部分を、安政六年に「板井君」（未詳）が、長崎の地に赴くので、参照させるために編纂したものという。また、それとは別に長崎市中での見聞を書き留めていたが、その部分は清書に及ばず、本書にも収められていない。

なお、「此分先書の写。此筋通行せず」と前置きして、その道程を罫線で囲んだ部分が五カ所存在している。「先書」が何を示すか不明だが、当面、罫線で囲んだ部分は、嘉永七年に英国は通行しなかったものと推しておく。

単に、道筋を示すだけでなく、英国が見聞きした、当時の風俗・建築・風景・しきたりなど、興味深い内容が展開される。

注記

加島英国の伝記については、柴田実編『北海部郡教育史』（一九三二年、北海部郡教育会）、臼杵市市史編さん室『臼杵市史』（上）「第六節　近世臼杵の文化」（一九九〇年、臼杵市）を参照した。なお、本研究は JSPS 科研費（課題番号 JP18K00323　研究代表者、鈴木元）の成果の一部である。

凡例

一、原本に忠実に翻刻したが、原則として旧字体は新字体に改めた。

一、適宜、句読点を施した。

一、図など省略した所がある。

一、判読不能の箇所は■で示した。

一、割り注は〈　〉により示し、改行箇所は／で示した。

長崎道中日記（外題）

（内題なし）

此書は嘉永七甲寅如月、水野筑後守侯長崎御奉行の時、当藩より絵板返達の御使として、■禁天■■至るに又したがひて、予と彼地に趣く道の日記也。長崎往返道筋の事は清書せしかども、崎陽に到着滞留中、遊歴且見聞の事は兼而聞置候事。又、今般、現に見聞せし事など、道中記草稿に書留置しといへとも、其後故ありて、寸暇なく」（1表）未た清書に及ばす其侭捨置ぬ。此度、板井君の彼地に趣玉ふこと、平野君の告あり。俄に取出し、仮に表紙をつけ編て絵図なと取そろへ、取敢す貴覧に備ふ。他日、暇の日を得て、長崎市中見聞の事とも書加へ、全備してひとまきになさんと思ふのみ。

安政六未臘月晦」（1裏）

嘉永七年甲寅二月廿三日

今日壬辰の日にして、今明卯八刻、春分二月中之節に入。且、彼岸の中日也。

一、廿三日　晴、後大南風に成。暖気夜に入雨。卯上刻、臼杵城下、出立。

野津市　臼杵城下より四里

巳刻に着し、御代官所に休。

柳瀬　虹澗橋小休。

杉馬場

馬場中へ村役人罷出、敷物を儲、茶を煎し差出す。至て丁寧也。

三重市〈野津市より四里。／臼杵城下八里。〉

申刻過、大庄屋多田駒之丞宅泊。」（2表）

一、廿四日〈朝曇巳刻より、追〳〵霧晴。午刻後、／晴天気候もしまる。〉

卯刻、三重市出立。

玉田村

岩戸川

手前は臼杵領、川中の堺にて、向は竹田領。牧組柿木村也。岩戸村と申は無之由。往来は、飛石渡り。　公用に付、村役人罷出、いかだ二ツにて渡之。諸事丁寧也。

柿木村　岡より四里。標石建。

松尾村

此村入口より山庵は寅、姫岳は寅卯に当る由。

牧口村〈三重市より弐里。／竹田城下へ三里。〉

野尻川」（2裏）

此川幅壱丁余り。冬より四月八日迄、土橋架る。

又、出水の節は渡り止る由。

上は原尻の滝より、此野尻川に流れ、末は沈堕の瀧に落る也。

野尻村

此所より緒方の津留迚、広く五千石、五ヶ組の所也。

井上村

右に、禅宗、大福寺。

当二月朔日より晦日迄、大会五祖録提唱。肥後熊本見性寺賜紫蘇山大和尚の講師也。三月四日より四月四日迄は、臼杵領野津院板屋村の禅宗蛾嵋山普現寺にて大会有之由也。

左に、知田村を見、

右に、八幡宮百壇高し。

馬場村

下自在村」（3表）

上自在村〈三重市より四里。／大庄屋　森十郎助〉

南に緒方、原尻の瀧見へる。高十間余。幅広く、沈堕の瀧に次。

上自在村の下川端に、緒方三郎維基石塔見へる。

右に、八幡宮百壇あり。前小き仙石橋。

大久保

右に祖母山、奥岳、片向山見へる。

炭焼

片ヵ瀬原

古き大木の松あり。此所中川侯馬責場、且、騎射馬場あり。文化年中、岡藩中志水雲四郎元古、騎射の衰を嘆き、再興せし事実を石に記せしあり。

馬場長、百弐十間、幅六間。

左右に桜を多く植たり。

此所より、姫岳寅卯之間に見ゆ。」（3裏）

片ヵ瀬村〈上自在より壱里半。／大庄屋　児玉虎三郎〉

午刻に着。

当村より、岡御城能見へる。

ぬめり瀬川

板橋架る。長弐拾間余、幅弐間。

ぬめり瀬坂

至て急成坂にて、御城へ登る。

岡城下　　片ヵ瀬より壱里。

豊後大野郡岡城主、中川修理大夫侯御城下にして、一名竹田ともいふ。御高は七万四百四拾石余、柳間〈江戸より／二百七十一里十二丁〉、臼杵より拾三里、三重市より五里、片か瀬より壱里。岡城は、左右にぬめり瀬川と七里川といふありて、城は其中にあり。ぬめり瀬坂より登て大手御門前を通る。城地高くして、本丸に三重の天守、雲に聳へて至て高く、裏方下原御門とて、御蔵も見へて」（**4表**）其中に、静嶽大明神とて御先祖の中川瀬兵衛尉清秀侯を祭る社ありといふ。大手御門下より惣役所前通、侍小路、長臣中川平右衛門殿屋鋪あり。御成門、表門には定紋二つ見へ、其関中切石見込、宜打廻りて、通用門あり。又、打廻りて七里川筋に物見あり。一構の屋鋪也。其続の川下に学校あり。中川玄番屋鋪を其侭学校にせし由也。

七里川　板橋　帳〈十四五間／一間半〉

此橋（ハシ）を渡り、向に禅宗永雄寺、御米蔵。夫より川端に馬場ありて、中川侯御菩提所、禅宗龍護山碧雲寺、門内至て広く、松林の中に本堂、額は碧雲寺とあり。堂の左右抱柏の彫紋を懸たり。箱玄関唐破風、山手に御霊屋社造り、見付に高横に四つあり、庫裡は萱葺也。又、七里川を渡り下町通本町、宮津や、加嶋やの前通り、真宗」（**4裏**）西光寺脇より登り、切通しになる。下町通り見返れは、弥五兵衛坂とて山の端に時鐘堂あり。町屋下内に見ゆる。鴉ケ嶽の山手を下り、左右墓所あり。

山手河原

土橋あり。川端に芝居床あり。角力場あり。

あぞう川

土橋あり。右に中川侯御茶や。杉垣見へ、中に池あり。三角造りの数寄屋など見へて、花火御遊覧之所といふ。

岡の町は町幅広く、そぎぶき等打交にて、近年大火後の事に付、惣体新宅にして奇麗也。魚町には諸魚多く、中〳〵繁昌の地也。

岡御城中は太鼓町は時鐘也。

岡領は三十六丁壱里也。」（**5表**）

玉来　〈竹田より壱里／大庄屋　大津重兵衛〉

一筋町にして道幅広く家具百軒余、竹田の町よ

りも此所くつろぎたり。左の方に富家あり。松屋矢野勘三郎質店にて、七十人扶持は代々、弐拾人扶持は一代限り。合九十人扶持。浪人格之由。其隣に松屋矢野勘吾薬種店也。向ひに、松屋善十郎といふ別家あり。小間物店にして、門に松を植たり。三家共、家の紋、丸之内五枚笹也。未刻、此宿（シユク）之休〈岡領城下より三里四方造酒を／禁ず。よつて玉来の富家造酒／なしと聞〉。

君か園

穴井迫　八幡宮あり

戸上

菅生原

此原至て広く、諸方能見へる。中にも臼杵の山〈〈。

姫岳　寅卯間　山庵　寅」（5裏）

岡城　丑寅間　片ヶ瀬松　寅

阿蘇山　申　久住山　子

祖母山　巳

祖母山の嶺に祖母大明神社有。日向、肥後、豊後三国の境にして、菅生村より麓迄五里。

麓より峯へ三里。

此菅生原、両方の畑地は高く、中の道は極卑くして、道よりは左右を見る事なりかたく、両側の上に上れは、遠見自由也。

菅生村〈玉来より弐里半／大庄屋　堀源左衛門〉

此辺竹田在にして極辺鄙也。土地甚高、極寒の地也。梅の花漸盛。

申半刻過、当村に着。大庄屋宅差（普請）間に付、同村小太郎宅へ泊。

此村、家毎に屋鋪四方、杉を植て風を防く。

一、廿五日　晴。

卯刻過、朝霜を踏分て出立。廿四五丁行、右に田代村を見る。往来に高札有之。夫より」（6表）十丁程行て、堺の谷といふ所に至。

〈従是西　細川越中守領分〉

〈従是東　中川修理大夫領分〉

境の棒木建之。肥後領の方には、出店壱軒有之。笹倉之内之由。夫より原中を一里行。千人墓とて百人宛の墓十あり。

○此辺極寒の地なれとも、波野原南向暖成所へは

福寿草生へたり。

しうとの

此所より直く行は笹倉に出る。

左手に行は坂上へ直に出る。半道近き由に付、我輩は近道に行。

笹倉　菅生より弐里半

此所、店家数々、細川侯御休所有之。夫より壱里行て、左の方、小屋壱軒あり。中侍に、熊本より拾四里之棒木建之。

坂上（サカノウヘ）〈笹倉より壱里半／坂梨へ半道〉

出店二三軒有。

此辺、波野原とて至て広き所也。」（6裏）菅生村より笹倉坂の上（ウヘ）の土地極高く、寒気も別して厳敷、梅の花、此比漸開位の所、此坂の上より坂梨へ下ると追〳〵暖気に成。阿蘇谷を過、二重の峠を越て、熊本に近寄と大に暖に相成候由也。

笹倉坂の上へ出ると肥後侯往来の道筋にして道幅広く、並木道造至て奇麗（キレイ）。誠に大国の道中と思わる。

坂梨の坂　〈（上）たきむろ坂　（中）かまわり坂／極能所也〉

世俗にいふ大坂に坂なし、坂梨に坂ありとて、殊の外急なる坂也。我輩、下りゆへ左程には思はされとも、肥後の方より此坂を登らは、嘸かしと思ひやらる。東海道中相州箱根を通る俤あり。

此辺坂梨人参を産す。

坂梨　〈菅生より四里半／笹倉より弐里／惣庄屋渡辺根子（ネコ）八郎〉

巳半刻に着。」（7表）

此宿、町之長さ七八丁も可有之。町の中に突上ヶ木戸番所有之。長崎へ罷越候段、相改子細無之。右に細川侯御茶屋あり。其並ひに富家あり。虎屋亀蔵三階居蔵造りの立派の新宅あり。左に会所あり。此所人馬継立所也。町迦より十五六丁行。右阿蘇の宮道と追分有之。此所より阿蘇宮へ八九丁有之。

宮地　村数あり。家員も多し。

阿蘇宮　宮地にあり

前に川の流あり。本社は東向にして、神門廻

廊厳重也。本社両社並ひて、一の宮より五の宮の額あり。左右にて十社跡へ退きて一社あり。是に額かゝる。二社合て十二の宮と聞。南の方に大宮司の宅あり。中納言友成の末裔にして、昔は三十五万石も領したりしが、今は肥後侯より三百石の寄附之由。此宮地の神事は六月廿四日也。

阿蘇山は左の方に見へて、猫嶽に隣る。」（7裏）阿蘇山の西方の峰に新地嶽とて、殊之外煙立。此春よりは、別して御山荒れて、既に今日など、よなと申て硫黄の煙かす降。実に霧の降がことし。

去嘉永六丑冬、阿蘇大宮司殿三男大里時、千代殿、肥後熊本藩中松野亘殿三千石、養子に御引越之由。

シウト村

役人原村に霜宮といふ有。往来より三丁程。

今町村

黒流村

手摺付の土橋あり。

暫行と杉馬場。

阿蘇谷は、四方山続にて、山にて包たる谷也。二重の峠が切レとの由。

阿蘇谷　惣庄屋二人　渡部根八郎。
　　柴田林之助。

内牧　坂梨より三里

此駅内拾五六丁も可有之。駅中に、細川侯御茶屋、右に有之。肥後に通り候は、坂梨より」（8表）坊中町弐里、夫より二重之峠通りに候へは、壱里近きよし。

未刻此駅に休。

内牧宿迦れに、八幡社有。橋を渡。熊本より十里之棒木有此。道の傍に亀石といふ有。左の道下に無田有。阿蘇大明神之裏、千丁無田迚、至て広し。川を隔、向に前千丁無田とて見ゆる。或東千丁、西千丁ともいふ。凡、阿蘇谷中に四十八石有之由。此阿蘇谷川筋を黒川といふ。阿蘇の南郷より出る川を白川といふ由。白川は名所方角抄にも見へたり。右、黒川をは、なまづ川ともいふ。

阿蘇山本宮へ参詣は、坊中町より六十丁程登山

之由。本宮より御池迄、十六七丁程有之。御池より湯の谷と申所へ壱里之由。温泉有之。熊本辺よりは入湯も致候由。止宿には恰好不宜。乍去、坊中町昼時分より出立、登山候得は湯の谷迄、漸々行程」（8裏）の由、右阿蘇山より南の方の谷を南郷と申。阿蘇より北の方、坂梨、内の牧辺を阿蘇谷と申。右両谷にて、弐万八千石と申候へ共、新田多き所にて、御年貢は四万石余も納候由。右、阿蘇本宮へ参詣登山に候へは、湯谷より南郷通り大津へ出候方、便利宜きよし。尤、二重之峠を不越、直に大津の宿に出候て、山越は軽きよし。乍去（サリ）、小石数々の道筋にて通行難義のよし。

刈尾村　出店三四軒有之。
　此村手前に熊本より九里之棒木建之。
産ノ小屋　出店有之。
此間、的石村手前道上山中に的石あり。阿蘇明神とへん嶽より弓を放ち玉ひし的石也。暫行、夫婦石といふ有。是も四十八石の内之由。」（9表）

的石村
坂の下　内牧より弐里。茶や数々有之。
二重峠（フタエノ）
　峠に家壱軒有。細川侯御駕置場も有之。此所より肥後国は勿論、天草、肥前地、雲仙嶽等、相見眺望無限。坂下より登り、古道は右手、新道迚、近年新開の二重の峠左手の腰を廻りて登る。新道出来、桜の木を多く植たり。道宜しきゆへ、只今にては古道を行人なく、皆新道往来と成。峠より十丁程下り、熊本より七里之棒木建之。
中茶屋　四五軒。
方里か谷　茶や三軒。
天堤　同三軒」（9裏）
　此所より杉馬場始暫行て、熊本より六里之棒木建之。

高尾野　茶屋七八軒
大津駅（ヲヽヅ）　内牧より五里。
此町の入口に行程、四五拾間程、桜馬場有之。

駅の長サ凡弐拾丁余も有之。人家凡三百余も有之由。左に細川侯御蔵所、且、御陣屋并惣庄屋之会所、人馬会所等有之。
今日は、二重の峠を越と日暮候て、漸戌刻過大津出迦木戸の外、友町蔵屋勘兵衛（清吉トモ―左に傍記）宅泊。今日道法十三里余。

一、廿六日　快晴、春霞暖気。
卯上刻大津駅出立。大津宿迦より行程十四五丁程、桜馬場あり。此地暖気の所か、」（10表）桜も咲出、日の出に花の色のうるはしさを詠つゝ行通ふ。旅地の面白さ、たとへんかたなし。登行て杉馬場に成。道幅五六間、或は七八間。此馬場は両側卑きゆへ、四方の詠も出来て鬱散せり。昨日の通りせし天堤より大津迄の杉馬場は、両側至て高きゆへ、脇目も出来ず。うちくもりたる所を夜道に通りたるゆへ、別して鬱陶敷草臥しか、今朝はきのふに引替て、四方の詠に心地よく行通ひぬ。杉馬場長十五六丁行。
南方村
枯木の町　大津より壱里。
此町手前に熊本より四里の棒木建之。此町内左の方、大原之神社有之。
大久保　大津より弐里半。
此所茶屋三軒有。十丁程手前に熊本より三里之棒木建之。
小坂村」（10裏）
此間熊本より弐里之棒木建之。
上立田村之内
阿蘇三の宮
宮前茶屋三軒有之。

今日、此街道にて大津駅御蔵より熊本御城中へ運送する御年貢米の馬、五里の間打続しに逢ふ。其馬多く女馬と見へて、壱人にて四五疋宛繋きて是を引。
三斗　俵弐俵宛竪につけたり。間に横つけにしたるは私の売米之由也。誠に夥敷馬の数にて、往来も難出来程の事也。朝より昼迄は熊本をさして出。昼後よりは大津の方へ群て帰る事にて、流石大国の事は、目の覚たる事共也。肥後より西の方、肥前、両筑、豊前迄も馬に荷のつけかた、米、薪、其外多くは竪つけ也。臼杵は横つけの所ゆへ、竪つけは珍らし。肥後領は、冬分最寄〳〵に御年貢取集置、春に

いたりて御城中の」（11表）御蔵に御引移之由。諸方より嘸々夥敷事と思はる。

三軒茶屋

熊本札の辻より壱里の棒木建之。此所より弐三丁行て、細川侯御菩提所、禅宗泰勝寺あり。門前道より右手也。此本門に向ひ行程三丁余り、杉桜馬場あり。此所を立田口といふ由、此泰勝寺、山号龍田山と申。方丈庫裡、山手林の中に遠見。奇麗に見ゆる。

熊本城下　大津より五里。

肥後国飽田郡熊本城主細川越中守侯御城下、御高五拾四万石〈大広間／江戸より〉。」（11裏）

坪井町

観音橋　観音坂

京町

氏家甚左衛門屋鋪前通。此氏家は、美濃三人衆末流之由。知行三千石。

新堀御門より入

百間石垣之下、下津久馬郡氏、平野氏、前通二の丸御門を入。左に長岡左仲、小笠原美濃知行六千石。尤、新堀御門より入。左に埋み門有之。此内に入候段、六ヶ敷由。此御門内に入候得は、大手の前を通り、御花畑も遠見被致候よし。鶴崎とか佐賀関の者と申候へは、通り候ても咎無之哉之由。右二の丸御門を入。長岡竪物、溝口氏、田中氏、住江氏、前通かぶき御門より出。小笠原美濃門前通、法心坂御門より出、札の辻、夫より新町通三条目。」（12表）御門より出、此御門内人馬会所有之。

新町二丁目　松原屋英次郎　泊。

午刻右之宅へ着。昼食事致し、案内者相被任。此仁六十有余の老人にして案内。

未刻より熊本見物。職人町通、札の辻、広小路に出、薬師坂より上る。左側、高山氏、島氏屋敷前通り。

藤崎八幡宮

熊本宗廟　御祈願所　社領八百石

大宮司　従五位下　行藤但馬守

社僧　神宮寺

御紋所　下り藤

此社は九百年余に相成候由。先年、勅使下向之節、馬の鞭藤を土中にさしける時、其藤より枝葉生出て、今盛之よし。其外藤の棚も有之。清正公、朝鮮征伐の時も御祈願の由。」（12裏）

前に楼門あり。本社は檜皮葺。惣朱塗也。

本社の右に石碑建。松の古木の下に、

子の日松

肥後守清原元輔朝臣

藤崎の簷の巌に生る松の

いまいく千代の子の日すくさむ

本社より下に六所大明神の社あり。夫より小き木戸を出、杉馬場通り左に谷山村を見、陣橋を渡り、右手の山の端に浜丁様と申御隠居被為入候。御殿高く相見へ、表御門は古京町也。

右、陣橋より桜馬場有之。左右此所田畑。

向ひ山手の麓、槙崎村に入。長岡内膳殿屋鋪あり。御家門也。此屋敷、今の浜丁御殿にありしを、此槙崎に」（13表）移して、跡に浜丁御殿御立被成候由。

本妙寺　槙崎村の山手に有。

日蓮宗　発星山本妙寺（ホッセウ）

入口燈籠見事也。文政六未三月、

御花畑内維女と有之。向に下馬札石にて建之。

馬建も有之。左に取、門に入。

門の額　発星山

此門の右に番所、門内より本殿迄八丁之由。此内五丁程は直道を行。石壇を上り、又、弐丁程行。右七丁程は桜馬場。

今日、彼岸の結願にて、両側の桜花満開にして、折しも春秋二度の千部経執行中なれは、熊本より貴賤の参詣多く、いと賑やかなり。

両側塔頭、十軒余有。右桜馬場を過、本門迄、石壇。

此石壇の始めに唐金の獅子の香炉弐尺に、四尺位」（13裏）石壇の左右に御影之石の玉垣。此石夫々に施主の名前彫刻す。本門の傍に小門有之。何も赤金葺。本門の傍に蓮形唐金之水鉢有之。四尺に六尺位之石鉢之中に有之。蓮葉より流れ出、石鉢より又々蓮葉に水相廻候様拵有之哉と存。此水鉢に蛇目の金紋有之。

水鉢之近辺に茶や有。田楽飯有之。且、手前石壇

の下にも茶や四五軒、釈迦堂之前、七字名号大成石、且、九輪之塔も有之。是にも七字之題目あり。
清正公御廟堂〈東向／四間に六間／朱の玉垣〉
　玉垣の内に馬脳石燈籠有之。
　堂前、花立筒の石一対。八代自嶋石也。
中央の額清正公大神儀
　　清の嘉慶年中書也。
拝殿　三間に六間
　額　浄池院とあり」（14表）
此拝殿の前に左右大釜二つあり。蛇目紋と用水の文字滅金にて記し有之。此左右に唐銅之燈籠、且、唐金之獅子之香炉も有。
本廟の左右、瓦ぶき小堂あり。
　右は　大木氏先祖の墓といふ。
　左は　唐人の墓といふ。
本廟の傍に大名の碑銘建之。
　　（図略）
　　一名
　木維善撰　〈高三間／幅一間半〉
絵間堂　三間に六間
僧衆請所
　　此処より御守御影等差出す。
　　並の守は十二銅。
本妙寺は本門を出、石壇の麓にあり。本堂至て、多く惣板敷。参詣之節は右側也。本門、庫裏門、弐つ有之。」（14裏）祖師堂、鐘楼、番神堂、七面大明神、方丈等、数々有之大地也。本堂は南向也。
　　（略絵図あり。省略）
　　」（15表）
本妙寺、清正公参詣相済、夫より又熊本城下に帰り、今京町通り。
今京町　八百屋嘉次郎
　此旅宿、当時手広にて間口も広く間敷も有之。臼杵家中を始、町在清正公参詣の人多く、此家に泊る。尤、清正公参詣に便利宜故の事也。
　此宿より清正公へ十三丁有之由。
夫より広丁かみなり伊勢屋向は小原や。又、上行寺町の方へは、河内屋とて熊本第一の豪富有之由。
知行九百九十九石。
瀬戸坂（京町）には阿蘇大宮司の装束屋鋪、其下に大友家の松野亘殿屋鋪あり。三木の紋長屋門、此両家は萱葺にして至て麁宅也。

上通り丁には、可児才蔵の末、貴田孫衛の末、御天守下通丁、御馬屋橋の左右には、三千石、尾藤金左衛門〈右手／也〉、有吉の別家、有吉市郎兵衛〈左手／也〉。

御天守下御堀　大手御門は西にあり。」**（15裏）**

御天守　五重櫓にして西の方に付出しあり。此所に、加藤肥後守藤原清正公、御存生中、御手づから彫刻せし木像鎮座ます由。此威光によつて、当太守細川侯御城中の御住居出来がたく、常に御城外東の方にあたる。清正公の時、御花畑作らせられたる広き園に、御殿造りありて、御館に被成たる事也。又、御城中には太守の外、御家老たり共、御願なくても御出入も難出来。

且、焼火を禁ずといふ。

御花畑の裏　千石　益田（マシタ）弥一右衛門屋鋪。

新鍛冶屋町　村井椿寿の孫、村井同雲三百石の医師也。

通り丁　再春館といふ医学館あり。其近辺に、山室宗全、三百石。

熊本名物浜屋のむし羊羹の店。

真宗　延寿寺　大地也。

長六橋　〈長六は清正公朝鮮より連帰る／トリコノ内也〉

長五十間　幅三間の大土橋。」**（16表）**

此川、熊本城下中を流る第一の大河也。水上は、阿蘇おぐにより出る由。

右手に常芝居小屋あり。板屋根見へる。

宝町　赤星見寿製　真珠丸

居土蔵造り。大家にして此家の先祖、延寿寺の月閑上人の伝授によつて、此真珠丸を売弘む。当時の主人は赤星三寿と申由〈八十有余。番頭に出会／聞之〉。真珠丸、壱服十粒入四十文也。十服買候へは、壱服は添候由。

荒増、熊本城下見物いたし候。日も暮に及候へは、新町二丁目、松原英次郎宅へ帰る。

」**（16裏）**

一、熊本領に入と道幅広く、杉桜松の馬場にて、いかにも大国の街道と見へるよふに、奇麗に道々の掃除届きたり。東海道も及はさる程の所多し。

一、〈熊本より壱里〉

右之通り壱里毎に、城下の四方国境迄棒木建之〈多く傍に榎あり。／一里塚は向ひ合せにあり〉。

一、〈従是東　細川越中守領分

右之通りの棒木、格別大きく御国境毎に建之。余国は多く石也。

一、熊本三家老は、長岡帯刀、長岡監物、有吉頼母。

一、百石以上五人。

長岡帯刀、八代、長岡監物、有吉頼母、沢村。

一、二の丸内に時習館といふ学校あり。」（17表）

一、長岡監物殿百間石垣と申は、長百間、高拾間。其石垣の築方、目覚しきものにて、江戸にも無之程に覚ゆ。

一、熊本は、清正公築城にして、凡て江戸の見附に似たり。御門、石垣等、大造がつまなる事。凡て江戸に次。

一、一家中の風儀、他国無類、別に一国の風あり。男子は惣綿服、衣服、袖、裾短く、されとも仕官の人、袴を離さす。手習子の童子迄、短羽織に短袴を着し、書物と弁当肩に負、城門に朝〳〵入来る。又、御役人に相成候へは、絹布着、立派の装ひ也。御家老、御中老は平日駕、御用人、御小性頭は平日継上下、四人供〈若党両人／鎗指　そふり取〉。途中、御小性頭、高見権右衛門殿を見懸しより、四人供にて継上下もつ立髪也。屋鋪は、法花坂にありといふ。婦人は絹布にて立派に、又女の髪は昔風にしていとやさし。

一、御菩提所

禅宗　高麗門外　妙解寺

同　立田口　泰勝寺」（17裏）

一、壺井、竹辺の禅宗見性寺は、長岡監物殿菩提所にして、当時蘇山和尚迚、名高き知識出たり。

一、長岡内膳殿、先祖長岡伊豆は細川氏惣領家の家筋なれとも、大坂方ゆへ家臣と成し由也。

一、水禅寺の御茶屋、立派之由承候。

一、柳川小路に、立花家の屋舗跡あり。是は清正公吹挙によつて、御大名に相成候由。

一、家中田中氏、平野氏抔、屋鋪構へ長屋門之内、檜皮葺、唐破風、弐間半、玄関、奏者罷出居。江戸通り也。

一、肥後領分中、

猿田彦大神と彫たる石所々立。

道祖神なれはかくこそありたきもの也。

一、肥後領中、人馬継立無遅滞差出し候とも、増賃等ねたりかましき事申出ず、至て神妙也。能々申付方の行届き候事とぞ。

一、肥後領内、一統旅人止宿。

七銭三匁五分に定る。尤、昼食共々。」（18表）

一、熊本　古町　番木や茂左衛門。

一、熊本風呂や、上方通り、男女差別〈一人前／七銭〉。

一、熊本は謡の流行する所にて、風呂の内にても謡ひ、道等行にも謡ふ。

一、清正公参詣には、京町に旅宿すべし。京町よりは清正公へ十三丁。新町よりは、廿四五丁有之由。熊本城下にては、新町か真中といふ。

一、新町二丁目　沢屋茂三郎。

薩州太守御本陣也。

一丁目　湊屋。

二丁目　松原屋英次郎。

皆氏家宿也。

一、熊本城下、町屋門口に悉表札を出す。

何屋
何何左衛門

何屋何兵衛

何何左衛門家代
何右衛門

○士席浪人格之分は、別に家代を立置。

何屋何より
懸屋鋪

何屋何兵衛
後家

大工 何平
畳刺 何平

町迦職人と見ゆ」（18裏）

一、熊本は凡ての大さに似合ぬは神社也。藤崎八幡を始め、皆小き社のみありと聞。

一、熊本之城下は侍小路一通有之候へは、町有之。又、侍小路町と段々有之。三千石以上之家居は、東都御大名屋敷に等し。町屋も広く、其上は谷々にて一目に見へかたし。尤、当国は道路広く、別て二重峠よりの道広く、大津手前より熊本迄は、五六里之間、杉桜馬場見事也。

一、長崎へ行には、肥後より柳川佐賀廻り致候に、熊本へ立寄候は、五里之廻り也。大津より山鹿へ五里、熊本へも五里也。猶又、熊本より山鹿へ五里、大津より熊本へ廻り候得は、山鹿へ五里の道、拾里に相成候。尤、熊本より高橋へ壱里半。此所より嶋原へ

渡海七里。実は拾里余も有之由。右七里之渡、船壱艘借り切に候へは、壱〆八百文位之由。乗合に候へは、壱人前三百文位」（19表）之由。尤、嶋原より長崎へ弐拾三里之由、佐賀廻りは、五拾里大き成違ひ也。尤、嶋原に着船之上は、船問屋より番所へ相改揚り、手形番所より出候由、尤、往来手形差出す。右手形料、廿四文位差出候由。大船揚り手形、嶋原より八里、合津と申所番所へ差出し候由。右之間、西郷へ止宿いたし候得は、同所長浜之番所より一宿承届之裏書いたし候由、承及候。尤、嶋原通り長崎へ行には、矢上の町中に出る。

一、熊本魚類は、上より直段御極被成候由。魚の棚、魚之直段付懸札有之。鯛は懸同面目に付、壱匁五厘抔と有之。内々相場、相立候也。魚は都て懸同売買之由。

一、熊本領に限りて、鶴崎手永、関手永、山鹿手永抔いふ名あり。」（19裏）

一、廿七日　晴、夕方西風に成。曇、寒く成。夜晴。熊本卯上刻出立、出町通り。

大久保　茶や四五軒有〈熊本より／壱里半〉。

暫行、左にきとのきちし越、高瀬への追分有。

三曲（ミマゲ）　茶や七軒。

入口　阿蘇宮。

鹿子木　店数々。

此入口、熊本より弐里之棒木建之。

夜鳴の小屋　茶や三軒。

植木宿　熊本より弐里半。

入口桜拾株斗、宿内拾丁余。

此宿、武家方止宿不相成由、右田氏の日記に有之故、其宿の人に尋候所、決して左様の事は無之。武家方の御宿も仕候由申之。」（20表）

左に人馬会所。東海道の通りに有。

此往来は薩州、肥後、人吉、宇土侯、江戸上下の駅路也。

宿内左に一向宗金蓬寺、笠松あり。熊本より三里之棒木建之。

みどり町　茶や有。

内村

此間熊本より四里之棒木建之。

むすふの小屋　四五軒有。

広野町
　弐三丁行、熊本より五里之棒木建之。
櫨の小屋　茶や壱軒。
郷原村　村中店壱軒。
南嶋村　茶や三軒。
　此村より五六丁手前、従是北山鹿郡之堺石建之。此辺山鹿手永といふ。打開きたる津留也。」（20裏）
山鹿宿　〈家員十軒／植木より三里半〉。
　宿入口湯の瀬川、湯の瀬橋といふ土橋あり。長四十五間、中三間、手すり付て中高のはし也。宿内十五六丁人馬会所、左側宿の中程也。少し手前右に温泉あり。
山鹿の温泉
　一の湯、二の湯、三の湯とて入湯、人も見へたり。午刻、此所に着て入湯。湯ぬるし。山鹿の宿出迦、目鏡石橋あり。第一番。
鍋田村
　同村之内、荒瀬といふ所。鍋田橋といふ橋あり。暫行。
　熊本より七里之棒木建之。
　同村の入口、よふめい上人杖杉あり。又、長き土橋あり。鍋田と岩村の間、従是西北玉名郡石立。
岩村
　茶や五軒、寺一あり。」（21表）
平野村
　入口、目鑑橋、長十間、幅弐間。第二番。
小永町（コエイノ）　山鹿より三里。
有谷村之内
小原　店弐軒。
　此間、熊本より拾里之棒木建之。
六本木　店弐軒。
今日、山鹿の宿手前にて、不意に白粉、紅粉にて皃を作り、三階松の紋付たる黒の単を着し、腰に一刀横たへたる役者に出会、道連となり所を聞は、備前の国岡山の産にして、嵐品蔵と申よし。狂言、物真似にて一銭の貯なくして、日本国中を廻りけるよしにて、山鹿の宿に入と途中にて千両幟一人にて八人芸の狂言あり。暫くイみて、旅中、鬱を

散しぬ。
南の関宿　山鹿より四里半。
家員三百軒、入口目鏡橋。第三番。」（**21裏**）長十五間、宿内十五六丁。
暮過着。豆腐屋庄市宅泊。
庄市宅座敷、長一間、幅三尺の額あり。大字にて、大鵬の二字を書たり。白雀書とあり。至て見事成ゆへ、誰人なりやと亭主に尋しに、薩州家中、鮫島吉左衛門とて、八十六歳の老人の筆なる由。

一、廿八日〈大北風にて寒気強く、終日大風吹。／夕方曇。夜に入少し雨。山々は雪降〉。
卯上刻出立。南関宿迦れ細川侯番所あり。夫より八丁程行。右に大津山大明神社、御山に引入桜馬場有。夫より八九丁行。熊本より拾壱里棒木建之。
外目村（ソトメ）　境木〈茶や三軒／内、酒や壱軒有〉。

木　〈従是東南　細川越中守領分　熊本札辻より十一里八丁廿間〉
石　〈従是西北筑後国柳河立花左近将監領分　柳川札辻ヨリ四里廿丁余〉」（**22表**）